

三内航海運史 VI 江戸時代 その4

大都市江戸の台所を支えた水運

江戸は、徳川家康が慶長8年（1603）に征夷大將軍の宣下を受けて幕府を開いて以来、政治的中心地となり、諸国の大名が屋敷を設けて武家と一族郎党が増大し、彼らの日常生活を支える商人や職人も各地から大量に流入した。新たな土地の確保のため幕府はまず、太古より日比谷入江に流れる平川から江戸城大手門までの間に道三堀を設け、そこから出た土砂で日比谷入江の埋め立て工事に着手した。さらに平川は東に延ばされ、隅田川に注ぐ日本橋川となって市街中央部に日本橋が架けられ、慶長9年（1604）に五街道（東海道、中山道、日光道中、奥州道中、甲州道中）制の設定で、全ての街道の起点となった。

江戸の開発を進める幕府は続いて、諸国大名から人夫を供出させ、神田山を崩して当時大川とも呼ばれた隅田川沿いを埋め立てる一方、水運のための運河を次々と巡らし、そこで発生した土砂でまた新たな埋め立てを進めた。享保年間（1716～1735）の江戸の人口は武家50万人超、町方50万人超の計100万人超で、当時でも世界最大の都市であったとされる。幕府が水路の拡充を積極的に推進したのは、この膨大な市民の消費物資の供給を人馬の陸上輸送ではまかないきれず、舟運の大量輸送に頼らざるを得なかったからである。

江戸幕府の命を受けた豪商・河村瑞賢（かわむらざいけん）は寛文11年（1671）、東北諸藩が領内の産米を江戸へ運ぶ東廻り航路を開設し、続いて同12年（1672）に天領であった出羽国の米を大坂まで運ぶ西回り航路を完成させたが、これが北前船の飛躍的発達に繋がった。東廻り航路は日本海から津軽海峡、三陸沖経由で江戸に入るため、多くの難所を通ることとなり、これを避けて内陸河川を通じて安定的な輸送を計るために運河工事が繰り返された。例えば、鹿島灘からは犬吠埼を回る航路を避けて那珂湊より湖沼を辿り、一旦陸路を経て北浦や霞ヶ浦から利根川を通じて江戸に入る航路もあった。

また、瑞賢は諸国から船で江戸に運ばれる物資の陸揚げの便宜を図るため、万治3年（1660）に新川を開削したが、その両側には各種の河岸（かし）を始め材木問屋、酒屋、醤油屋などが集まり、物資集散の要地として繁盛した。現在でもこの辺りには、酒や醤油醸造元の東京の出先機関が数多くみられるが、とりわけ新川付近は河岸に立ち並ぶ酒蔵の風景が、数多くの挿し絵や浮世絵などにも描かれている。江戸時代の狂歌にも「新川は 下戸の建てたる蔵はなし いずれ上戸が 目当てなりけり」と謡われた。江戸時代、新川の両側には酒問屋が林立して栄えたが、樽廻船がその年の新酒を上方から江戸に運ぶ早さを競った「番船競争」の記録が残っている。江戸に入荷する物資の中でも、上方からの「下りもの」が高級品として珍重され、関東近郊の産物は「下らぬもの」として二級品扱いされたが、これが「くだらない」の語源となったと言われる。新川は昭和28年に埋立てられた。

廻船航路の開発により、全国からの年貢米や生活物資は弁才船である菱垣廻船や樽廻船で江戸まで輸送されたが、大型船のため運河沿いの河岸には直着けできないので、鉄砲洲沖の隅田川河口付近の江戸湊で高瀬舟や舳に積み替えられ、隅田川中流と江戸の中心を流れる日本橋川、楓川、京橋川、三十間堀、八丁堀、亀島川と霊岸島に設けられた船着場兼物資の集積場である河岸に運ばれた。関東近郊から運ば

れた野菜や醤油などの生活物資も高瀬舟や舳により河岸に運ばれ、河岸で仕分けされて流通問屋を経て市中に配分された。

河岸の名称には木更津河岸、行徳河岸など特定の産地の物資を専門的に扱うことからつけられた名称。魚河岸、白魚河岸、米河岸、塩河岸、本材木河岸、薪河岸、竹河岸など取扱物資に関わる名称。浜町河岸、小舟河岸、鎧（よろい）河岸、柳原河岸など地域にちなんだ名称、などがみうけられるほか、竈（へっつい＝かまど）造りの職人が多く住んでいたことからつけられた竈河岸のような名称もあった。河岸の背後には白壁の土蔵が建ち並んだ。また、米の蔵前、干鰯（ほしか＝日干しにしたり油を絞った鰯の魚肥）の深川佐賀、生鮮魚の日本橋、野菜の神田、酒の新川など、物資別に集積地が決まっていた。

日本橋川に架かる日本橋と江戸橋の間の川沿いにあった魚河岸は、江戸初期に佃島の漁師達が将軍や諸大名に調達した御膳御肴の残りを売り出したことに始まった。鮮魚を満載した艀船（ひらたぶね）を河岸に横付けして取引し、表納屋の店先で売買したが、1日に千両もの取引があったとされる。付近には、俳人・松尾芭蕉や幕臣となった英国人航海士・三浦按針（ウィリアム・アダムス）も住んでいた。

また、魚河岸から日本橋を挟んで川の西側の一石橋までの一帯を江戸時代に北河岸と称した。この北側には北鞆（きたさや）町と品川町があり、一石橋側を「北鞆町河岸」、日本橋側を「品川町裏河岸」、川の対面を「西河岸」と称した。『江戸名所図会（ずえ）』によると、品川町裏河岸の通りには釘・金物の店が多く、釘店（くぎだな）とも呼ばれた。明治10年、東京府は「日本橋より以西、一石橋まで」の河岸地、西河岸の対岸を裏河岸と命名した。

江戸時代、日本橋小網町と日本橋蛸殻町の間には運河の箱崎川が流れていたが、寛永9年（1632）に南葛西郡本行徳村（現千葉県市川市）の村民が日本橋小網町の河岸地を幕府より借り受け、江戸と行徳間に塩や小荷物、旅客の輸送を初めて以来、前述のここを行徳河岸と呼ぶようになった。江戸と行徳を結ぶ船は毎日運航され、成田山新勝寺の参詣客らもこの河岸と水路を利用した。

現在の銀座1丁目と新富町1丁目に向いあう地区は江戸時代、北から流れる紅葉川に弾正橋、西から流れる京橋川に白魚橋、南西へと流れる三十間堀に真福寺橋が架けられ、この付近で交差していたことから「三橋」と呼ばれていた。この3つの橋付近の河岸は「蜷河岸」（あさがし）の里俗名が付けられていた。江戸時代後期には、江戸3大道場のひとつ、鏡新明智流の剣客・桃井春蔵が「士学館」を置いたことで知られる。現在のこの付近の川は、埋立てられて高速道路になっている。

江戸時代に誕生した河岸は、大小合わせ120カ所から200カ所もあったとされているが、正確な実数は把握されていない。

幕府は、河川水運により江戸に出入する人や物資を検査するため、川の関所である『船番所』を設けた。旅人の通行改めは厳格ではなかったが、商品流通を把握する目的から、積荷については極めて厳しく、米、酒、鮮魚、野菜、硫黄、塩などが特に重視された。米と酒は江戸の価格政策に関わり、生鮮食料品は真夜中の通関を許すほど気を使い、江戸に入る硫黄や出る塩は戦略物資として重要視していた。小名木川河口・万年橋北側にはいまでも、正保4年（1647）頃に設置されたとみられ船番所跡が残されている。江戸中心部から小名木川を通り利根川水系を結ぶ流通網は、寛永年間（1624～1644）に整い、ここを通過して物資が運ばれた。この船番所は、明暦3年（1657）の大火後、中川河口に移転して中川番所となった。

株式の街・兜町の高速道路下に現在でも、「海運橋」の親柱がある。この橋は、日本橋川に合流する紅葉川入口に架けられ、御舟手頭・向井将監忠勝（むかいしょうげんただかつ）の屋敷が橋の東詰めまで広がっていたことから「将監橋」、「海賊橋」とも呼ばれたが、明治維新後に海運橋と改称された。文明開化期に石橋に掛け替えられた海運橋は、関東大震災で破損して鉄橋に掛け替えられたが、昭和37年に紅葉川が埋立てられて撤去され、親柱のみ文化財として現在も保存されている。

忠勝は、大坂冬の陣で九鬼守隆（くきもりたか）らとともに水軍の将として出陣し、豊臣水軍を破り大阪湾の制海権を押さえた功績から、御召舟奉行（おめしふなぶぎょう）の旗本として異例の出世を遂げた。向井家は忠勝以降9代にわたって左近衛将監（さこんのえしょうげん）と舟手奉行を世襲し、江戸湾の警護や幕府水軍を任された。忠勝は八丁堀霊岸島に江戸屋敷を拝領し、ここが「将監番所」と呼ばれたことから、亀島川沿いには「将監河岸」の地名が明治末期まで残っていた。

協力・東京都中央区商工観光課

江戸水運関連の名所と文化財



隅田川に注ぐ日本橋川河口と豊海橋（中央右）。左は永代橋



隅田川に注ぐ神田川河口と柳橋（中央右）。左は両国橋。



日本橋の袂にある日本橋魚河岸の碑



河村瑞賢ゆかりの新川の碑



元浜町河岸の隅田川テラスには水辺ラインの船着場もある



行徳河岸のあった日本橋小網町付近は箱崎IC出入口



日本橋川の北河岸跡と今も名が残る西河岸橋（右下）



船番所のあった隅田川に注ぐ小名木川河口の万年橋付近



深川を通り隅田川に注ぐ仙台堀を利用して材木が運ばれた



大根河岸の碑（左）がある京橋付近（右）。江戸歌舞伎発祥の地でもある



江戸時代に3つの運河が交差し、それぞれに橋が架けられていたことから「三橋」と呼ばれ、現在は埋立てられ首都高速道路になっている銀座1丁目・新富町1丁目付近。蜷河岸があった



兜町に建つ「海運橋」の親柱



新川堤にある江戸湊の碑